

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	金 秉瑱
論文題目	生活日記を通じた「住まい」の場所論的研究 —朝鮮の住宅「雲鳥楼」を中心に—		
（論文内容の要旨） 本研究は、朝鮮の住宅「雲鳥楼」に遺る日記、柳濟陽が記した『是言』（1851－1922）、柳瑩業が記した『紀語』（1898－1936）を通して、住まいにおける諸場所の意味を明らかにしたものである。これまで朝鮮時代の住宅に関する研究は、主に平面構成の歴史的変遷や地域的特色の解明などが主題とされてきた。これに対して本研究は、日記を資料とすることにより、住まいの諸場所が利用される場面が具体的にどのようなものであったかということを明らかにし、それを通じて住まいにおける諸場所の意味を人間と住居との関わりの中で捉えている。 本研究は序、本論3章、結論および付録からなっている。序では従来の雲鳥楼の研究を概観し、この建物の成立経緯、増改築などを論じている。また、『是言』『紀語』の著者とこれらの日記が書かれた時代について、その背景を明らかにしている。そして、朝鮮に遺された日記類のなかでの位置づけを行っている。 第1章では、雲鳥楼の生活日記の著者である柳氏の「住まい」の諸場所の構成について懸板・家系継承・祭祀に関する記事をめぐって考察している。そして、懸板の位置とそこに書かれた意味から舎廊房（随分室）が家系継承の中心となる場所であったことを論じている。柳濟陽は若くして父親を亡くし、家は継いでいるものの随分室には起居できなかった。家事権、祭祀権を行使できるようになってはじめて、随分室に起居するようになり、この場所がこれらの権限を行使する者の居るところであったことを明らかにしている。また、雲鳥楼では舎廊房（随分室）が正寝と呼ばれることがあり、祭祀の中心とされることがあったことも指摘されている。 第2章では、社会情勢の変化が原因となった柳濟陽の隠居の事例が取り上げられ、それを通じて住まいにおける諸場所の意味が解明されている。日本統治という朝鮮の新たな時代に生きた柳濟陽は、人生の大部分を隠居（隠棲）して生活した。それは家長として居るべき場所である随分室を閉鎖し、あるいはそこから離れることで実現された。そのことから、随分室こそが家長と社			

会との関わりを形成する重要な場所であったことを明らかにしている。

第3章では、喪礼の場所から住まいにおける諸場所の意味を解明している。まず、喪礼が行われるのは、雲鳥楼では『朱子家礼』などの規範に従った場所ではなく、家族の身分秩序と場所の位階に従って、それぞれにふさわしい場所が選ばれたことが明らかにされている。家中の様々な場所が喪礼に用いられたが、舎廊房は使われなかったことを見だし、一方、舎廊房は祭祀には用いられていることから、亡くなった人を送り出す場所と先祖の魂に仕える場所に対する考え方に差異があったと結論づけている。

以上のように本研究では、雲鳥楼という朝鮮時代後期を代表する住まいを取り上げ、そこに遺された生活に関する日記『是言』『紀語』を通じて、そこでの諸場所の意味を具体的に解明している。つまり、朝鮮時代の士大夫、特に男性の生活が住宅内のどこで行われ、その行為において住まいの場所にどのような意味が付与されていたのかを明らかにしている。朝鮮後期の住宅は、儒教と性理学に基づいた長幼有序、家父長制、夫婦有別などによる家内秩序に従って形成され、利用されてきた。本研究は、このような事実を具体的な生活の場から解明し、従来知られていた住まいのあり方とは違う側面があったことを明らかにしたものだといえる。

最後に、付録として本論文で取りあげた以外の朝鮮の日記類を整理し、その概要を示した表が付されている。もちろん日記は膨大に遺されているものと考えられるが、その代表的なものがまとめられており、本論文の視点から簡略ながらそれらの日記に記された内容の特色が述べられている。

(論文審査の結果の要旨)

朝鮮の伝統住宅の研究は、空間構成の歴史的変遷過程とその地域的特色を解明することに主眼が置かれてきた。そこでは物として構成された住居の形態に関する研究が蓄積されてきたといえる。しかし、その住居の中で展開される生活については朱子学的規範などに則って観念的にとらえられ、そのような規範との関連のもとに住居の空間構成や歴史的変遷が意味づけられてきた。それに対して本論文は朝鮮を代表する伝統住宅の一つである雲鳥楼に保存される、19世紀－20世紀初頭に書かれた日記『是言』『紀語』に着目し、それを通して具体的な生活に即して住宅の空間構成の意味を明らかにしている点に最大の特色がある。

この論文の本論部分は3章からなっており、第1章ではまず各室に懸けられた懸板について論じている。雲鳥楼の懸板は初代の柳爾胃とその孫の柳億によって懸けられたが、前者はオンドル房に、後者は板間に懸けられている。しかし、舎廊房（歸晩窩・隨分室）にのみ両者が懸板を懸けていることから、この部屋の重要性を見だし、上記した日記のなかにその意味を探っている。そして、舎廊房で起居することが家事権、祭祀権の行使と同時に実現されることを見だし、この部屋が祭祀に際して「正寝」として位置づけられていたことから、これが家系継承の要となる場所であったことを明らかにしている。従来、朝鮮の規範に従って祭祀の場所は内棟の大庁あるいは祠堂とされてきたが、雲鳥楼では舎廊房が用いられたことを指摘し、実際の祭祀の場所には家ごとに多様性があったことを見だししている。

第2章では柳氏の隠居（隠棲）について論じている。ここでは日記の著者である柳濟陽の生きた時代の不安定な社会的状況が述べられ、一生の多くの時間を隠居して過ごしたことが指摘されている。そして、柳濟陽にとって隠居は社会との関係を断絶することを意味していたことを明らかにし、その隠居が舎廊房（隨分室）から離れて生活すること、あるいはこの部屋を閉鎖することによって実現されたことを日記から読み取っている。このことから逆に、当時の伝統的住宅においてその家の主人が舎廊房で生活する事は、社会的関係のなかで生きる意思を示していたということが明らかにされている。朝鮮時代の隠棲の研究は朱子学が生活に浸透した15－16世紀の文人儒者に関するものに集中し、19世紀に関する研究はほとんど行われてこなかった。しかし、19世紀は朝鮮において近代化への兆しが現れ、経済的にも発展した時期で、住居も大きく変化した。この時期の隠棲の研究は韓国住宅史研究においても必須であり、朝鮮における隠棲の歴史的研究の空白を埋める先進的な試みといえる。

第3章はこの研究の中核となる部分であり、ここでは雲鳥楼で行われた喪礼の場所が考察

されている。朝鮮では『朱子家礼』『四礼便覧』などの規範に則って内棟の内房・大庁で行われると考えられてきた。しかし、本研究では日記を通じて喪礼の具体相を明らかにし、住居内の多くの部屋が用いられたことを見いだしている。そして、喪礼の場所は、亡くなった人の家族内における位階と、住居内の部屋の位階が相応するように選ばれていたことを明らかにしている。これは従来の見解とは違う事実について、日記を通じて具体的に明らかにしているという点で、高く評価できる。

15－16世紀に朝鮮の住宅において男女の分化（舎廊棟の発生）がはじまり、時代と共にさらなる分化が起こったが、それに伴って喪礼も変化した可能性を示しており、今後の研究が期待される。さらに、本研究では喪礼に舎廊房が用いられなかったことに着目し、この部屋が祭礼には用いられていることから、当時の朝鮮の伝統的住居において、亡くなった人を送り出す場所と亡くなった人の霊に仕える場所を区別していたと解釈している。これは論証の難しい課題ではあるが、従来は内棟大庁、あるいは祠堂が祭祀の場所とされており、雲鳥楼にも祠堂があるにもかかわらず、舎廊房に神位が保管され祭祀に用いられた事に関しては、祠堂との関連等、今後の研究が必要であろう。

この研究は、雲鳥楼のみを対象としたもので、そこに限界があるが、従来のように住宅の空間構成を朱子学の規範に則って解釈するのではなく、近年数多く発見整理されつつある日記類を用いて、生活の具体相を明らかにし、それをもとに朝鮮時代後期を代表する雲鳥楼の諸場所の意味を解釈し、特に舎廊房の持つ意味を多面的に解明している点で高く評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年1月16日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降